

サザエさん生誕70年

国民的長寿コンテンツの秘密に迫る



弁護士知財ネット
ジャパンコンテンツ調査研究チーム
(東京弁護士会所属)
弁護士 平河 有里

1 はじめに

(1) 「サザエさん」はいわずと知れた日本を代表する漫画でありテレビアニメです。今年はそんなサザエさんの原作漫画の生誕70年に当たる節目の年です。それを記念して作者である長谷川町子¹の大型回顧展「よりぬき長谷川町子展」が京都、広島、東京の順で開催され（既に終了）、来年4月29日から同年5月24日まで名古屋の松坂屋美術館で開催される予定です。

サザエさんの原作は新聞に連載された四コマ漫画であり、連載は終戦の翌年である昭和21年から昭和49年まで、途中休載しながらも28年間続きました。昭和44年にはテレビアニメの放送が開始され、現在も人気番組として続いていることは皆さんご存知のとおりです。また、江利チエミ、星野知子、観月ありさなどの主演により実写ドラマ化もされてきました。

著作権の保護期間は著作者の死後50年ですが²、著作物の殆どは世の中に発表したとしても、人々の記憶に留まることなく短い時間で消え去っていきます。日々大量の著作物が創作されては消えていく時代の流れの中で、70年前に一人の若き女性が創作したサザエさんというコンテンツが、現在に至るまで現役のまま人々に愛されて続けているのは何故なのか、本稿ではその秘密に迫ってみたいと思います。

(2) 今回はジャパンコンテンツ調査研究チームの松井真一弁護士（長谷川町子美術館の監事をされています。）のお取り計らいで、同チームの伊原友己弁護士と共に、同美術館を訪問し、長谷川町子と十数年の交流があった館長の川口淳二さん、学芸員の橋本野乃子さんから大変貴重なお話を伺うことができました。後半にインタビューをまとめましたので、お楽しみください。

1 関係者は長谷川町子先生とお呼びになっておられますが、国民の多くが知る歴史的な偉人であるということもあり、本稿では、失礼ながら解説文では尊称無しで表記させて頂きました。

2 現在開会されている臨時国会において、TPP関連法案として著作権改正法案も提出されており、著作権の保護期間を50年から70年に延長する方向で審議されています（映画の著作権だけは、既に70年に延長されています。）。ただ、TPP関連の法改正は、TPP発効することが施行の条件とされる見込みであり、かつ米国の批准が発効条件となっております関係で、米国の次期大統領の政策により、70年に延長されるかどうかは依然流動的です。

2 作者長谷川町子の生涯

(1) 長谷川町子（以下、「町子」と表記させて頂くこともあります。）は、その半生を自伝的エッセイ漫画「サザエさんうちあけ話」（朝日新聞出版）に描き、これを原作としたNHK朝の連続ドラマ小説「マー姉ちゃん」³は昭和54年4月から放映され、当時大変なブームとなりました。最近では、平成25年に尾野真千子主演でドラマ「長谷川町子物語～サザエさんが生まれた日」がフジテレビで放映されました。

(2) 町子は大正9年1月20日に佐賀県で生まれ、福岡県で育ちました。父が早世した後は、母の貞子、姉の毬子（まりこ）、妹の洋子と町子の女性4人家族になりました。町子を含めた家族4人は全員、それぞれ個性的で才能に溢れていましたが、その中でも飛び抜けて個性があったのは貞子だったのではないかと思います。貞子は敬虔なキリスト教徒でありながら、ここぞという時の決断力があるだけでなく、リスクを恐れない行動力も兼ね備えていたようです。

(3) 町子が14歳の時、貞子は三姉妹を連れて上京しました。それから半年後、町子が当時の人気漫画「のらくろ」の作者である田河水泡の弟子になりたいとつぶやいたのを聞いて、貞子は毬子を田河水泡の自宅に行かせて弟子入りを頼むように指示し、実際に弟子入りすることになったということですから驚きです。その後、町子は弱冠15歳で少女漫画家としてデビューしており、日本初の女性のプロ漫画家といわれています。貞子の先見の明も凄いですが、いかに町子の才能が並外れたものだったのかが分かります。また、姉の毬子も絵の才能を発揮し、文豪菊池寛の小説の挿絵を描くなど挿絵画家として活躍しました。



町子（右）「仲よし手帖」連載中、毬子（左）女流挿絵家として活躍中 ©長谷川町子美術館

(4) 昭和19年に町子ら家族4人は福岡に疎開し、昭和21年4月22日、夕刊フクニチでサザエさんの四コマ漫画の連載がスタートしました。そんなある日、全国紙に有名出版社から町子と毬子に仕事を頼みたいという求人が載っていたことから、家族4人は再び上京することになり、漫画の中でサザエさんを結婚させて区切りをつけて連載は終了しました。

(5) 上京後、町子は夕刊フクニチからの依頼を受けてサザエさんの連載を再開しました。貞子は

3 マー姉ちゃんとは、実姉の毬子さんのことですね。

サザエさんを本にして出版することを思い立ち、貞子の指示により毬子が社長をすることになり、姉妹社という出版社を立ち上げました。その後、毬子は挿絵の仕事をするのではなく、姉妹社の社長として尽力し続けました。戦後で紙が不足している中、全くの素人でありながらも毬子は奔走し、昭和21年12月に「サザエさん」1巻の出版が実現しました。しかし、1巻がB5版横とじという特殊なサイズだったため、書店に並べにくいという理由で2万部印刷した1巻は大量に返品されてしまい、自宅の庭に倉庫を建てるだけでは足りず、家の中にも本が溢れる事態になったそうです。



「サザエさん」昭和22年発行・姉妹社 ©長谷川町子美術館

(6) そのような大きな失敗にも挫けることなく、貞子は縦とじに変えて2巻を出版することを決めました。その結果、2巻はすぐに売り切れて、その影響で横とじの1巻も売れて倉庫からなくなり、3巻以降もヒットして、サザエさんの単行本は全68巻出版されました。人気のあまりニセ本が出回るといふ事件も起こりました。なお、姉妹社は平成5年に解散しており、その後の著作権管理は一般財団法人長谷川町子美術館が行っています。

(7) サザエさんの新聞連載は、昭和24年から朝日新聞の夕刊に移り、途中休載しながらも昭和49年2月21日まで続きました。町子は著書の中で、雑誌、絵本などを含めるとサザエさんを7000回以上書いたとしています。町子は四コマ漫画の完成度に強いこだわりを持っていたようで、毎日連載するという仕事はとても過酷だったようです。町子は下書きを洋子に読ませて笑いが取れば合格ですが、そこそこの出来では納得せず、一番よいもの以外は捨ててしまったそうです。清書が完成した後も表情が気に食わないという理由で、ギリギリまで描き直すこともあったそうです。町子は制作のストレスにより度々胃痛に苦しめられるようになり、ついには胃癌になり手術で胃を切除しています。洋子の著書「サザエさんの東京物語」(文春文庫)によれば、家族は町子の健康を心配して仕事をやめるよう頼んでいたそうですが、一度だけ町子は、「でもね、いい作品ができたときの嬉しさや満足感は、あなた達の誰にもわからないと思うわ」といったとされており、町子が創作のために身を削って苦しみながらも、創作者にしか味わうことのできない、かけがえのない喜びを得ていたことが想像できます。

(8) 昭和44年10月5日、フジテレビでサザエさんのアニメ放映がスタートしました。主要な登場人物は原作と共通していますが、例えばマスオさんの同僚のアナゴさんのように、原作にいないアニメオリジナルの登場人物もいます。アニメの脚本には原作漫画が最低1話盛り込まれているそうです。平成25年9月、「最も長く放送されているテレビアニメ番組」としてギネスワールドレコード社に認定されました。

(9) サザエさんと並ぶ町子の代表作である「いじわるばあさん」は、昭和41年1月からサンデー毎日で連載が始まりました。町子は著書の中で、サザエさんは子供にも無害な家庭漫画で作者としてはヒューマニズムに飽きていたと書いています。いじわるばあさんの単行本の初版は26万部で、サザエさんを超える大ヒットとなりました。のちに東京都知事となった青島幸男などの主演により何度も実写ドラマ化されました。

(10) 平成4年5月、町子は72歳でこの世を去りました。生涯独身でした。没後、町子は漫画家として初めて国民栄誉賞を受賞しました。受賞理由は「家庭漫画（『サザエさん』）を通じて第二次世界大戦後の日本社会に潤いと安らぎを与えた。」というものでした。町子以降、国民栄誉賞を受賞した漫画家はいません。

3 長谷川町子美術館⁴について

町子と毬子は漫画で得た収益を元に、自分達で鑑賞することを目的として、好きな美術品や工芸品を買い集め、約130点の作品を自宅に収蔵していました。自宅に遊びに来た知人に、東山魁夷画伯の作品「春を呼ぶ丘」を見せたところ、自分達だけで楽しむのはもったいないという話になったことが美術館を作るきっかけとなりました。美術館開館に至る経緯については、町子の「私と美術館」という漫画に描かれており、美術館内に展示されています。

昭和60年11月3日、「長谷川美術館」としてオープンし、町子の没後、美術館の名前は「長谷川町子美術館」に改名されました。元々の美術館の目的は収集した美術品の展示だったため、開館当初は町子の作品は展示されていませんでした。しかし、オープン前から「長谷川町子さんの美術館ができました」と新聞などで紹介されてしまったため、「長谷川町子の作品を見られる美術館ができた」と誤解されてしまい、来館者から展示物は美術品だけなのかというクレームが寄せられたことから、急遽町子コーナーを設けて町子先生の作品を展示することになったそうです。また、年1回、夏季にサザエさんに特化してアニメと原作漫画を合わせた展覧会が開催されています。

収蔵作品は約800点、展示替えは年5回行っており、平成28年12月10日（土）から平成29年2月12日（日）までの会期は、収蔵コレクション展「長谷川町子が愛したものたち」洋画編を開催する予定とのことです。

最寄駅である田園都市線桜新町駅⁵から美術館まで続く商店街は、「サザエさん通り」と名付けられており、サザエさんのキャラクターの銅像やパネルなどが展示されています。途中には「Lien de SAZAESAN」という名のカフェがあり、メニューのサザエさん焼きは持ち帰ることも可能です。美術館の建物の外観は、町子の希望により煉瓦が用いられており、建物の全ての角は90度ではなく鋭角になっています。また、天井にガラスのスリットがあり、自然光が入るようになっています。美術品の保存の観点からは自然光は決して好ましいものではありませんが、定石にとらわれない自由な町子の発想が感じられます。

館内には売店コーナーがあり、美術館でしか購入できないサザエさんグッズも扱っており、B5版横とじのサザエさん1巻の復刻版も販売されています。

4 <http://www.hasegawamachiko.jp/>

5 サザエさんのアニメに登場する駅は、山手線のような高架の駅ですが、桜新町駅は、地下駅です。

4 長谷川町子美術館インタビュー

Q) 今年はサザエさん生誕70年記念ということで板橋区立美術館にて「よりぬき長谷川町子展が開催されていますが、反響はいかがですか。

A) 学芸員橋本野乃子さん（以下「橋本」）：今年4月から京都を皮切りに全国巡回展をやっており、京都の次は広島、東京の順で回って（注：既に終了）、来年は名古屋で開催される予定で、約500点弱の作品が展示されています。原作漫画を題材として長谷川町子展を催すため、新聞連載をリアルタイムで読んでいた方が来場者の中心になると思っていましたが、今回は若い方も来てくださっていると聞いており、巡回展を行う意義があったと感じています。

Q) 新しい美術館を建設する予定があると伺っており、構想をお聞かせください。

A) 橋本：町子先生は収集した美術品を展示する目的でこの美術館を作ったので、自身の作品を展示することは最初の構想とは違います。町子先生の作品はどのような場所にどのような展示をするのが一番ふさわしいのかを考えて、新しい美術館を作りたいと思っています。2020年の開館を目指しており、その年は町子先生の生誕100年にあたると共に東京オリンピックの年でもあります。海外の方も沢山来日するので、サザエさんを通じて日本の昭和史を学んでもらったり、日本人の生活や家族について知ってもらったり、日本のよさを感じてもらいたいと考えています。日本人でもサザエさんが最初に連載されたころの生活を知らない若い人達もいます。例えば、おがくずを墨と一緒に練って丸めて燃料として用いた「炭団（たどん）」など、今は廃れて生活の中からなくなってしまった道具などが数えきれないほどあり、それらにもう一度光を当てて日本人の昭和の生活についてサザエさんを通じて辿るきっかけになればと思います。また、サザエさんの世界感は幅広く、食生活もそうですし、ファッションは最先端のものを取り入れており、文化史としてみることもでき、いろいろな切り口でテーマ別に見てもらえる展示をしたいです。また、小さいお子さんはアニメから入っているので、アニメと原作との結びつき方やアニメで表現しきれない原作の良さを伝えることができたらと思います。

Q) 若い人には原作を紙媒体で読んでもらいたいということでしょうか。

A) 橋本：原点は新聞連載の四コマ漫画であったということを知っていただきたいです。ただ、今は見せ方がいろいろあると思います。新聞連載はサイズが小さいですが、例えば壁面に大きく映すこともできますし、立体的に見せることも可能でしょう。古めかしいものを展示するのではなく、四コマの魅力を新しい世界観と合わせていきたいと思っています。サザエさんで描かれている世界は、その当時は一番新しいものでした。具体的な見せ方については、どういう方法が望ましいのか今後模索していきます。実際に見て触れて体験できるような立体的なコーナーも用意したいと考えています。

Q) サザエさんは新聞連載から始まったということは、対象読者は大人だったのでしょうか。

A) 橋本：サザエさんの新聞連載は昭和21年から昭和49年までであり、その当時は娯楽が少なかったもので、大人も子供も一緒に読むものだったと思います。それをまとめて本として出版することで読者層が更に広がったと考えられます。

Q) 社会的な風刺など難しい話で笑いをとるのではなく、日常を題材とすることで大人も子供も関係なく楽しめたということでしょうか。

A) 橋本：そうですね。漫画の中に実際の事件が登場することもありましたが、基本的には日常生活を切り取っており、例えば隣のおじさんの話など、誰でも身近に感じられる内容でした。夕刊フクニチで連載されていた初期の頃は、サザエさんが結婚する前の話なので家族がテーマであり、結婚後は日本の経済状況が変わって物が豊かになって電化やファッションが進み、昭和40年代になると誘拐事件や公害問題なども登場するようになりました。

Q) 作者としては漫画を通じて何かメッセージを伝えたいという意図はあったのでしょうか。

A) 橋本：メッセージ性を持っているように思われる作品もあります。例えば三億円事件については何度も作品に出てきており、町子先生は自分が興味を持った事件についていろいろなバリエーションで見せていくということをしてしていますが、漫画を通じて自分の意見を打ち出そうとはしていなかったと思います。



「サザエさん」(昭和21年
4月22日・夕刊フクニチ)



「サザエさん」(昭和31年
7月27日・朝日新聞朝刊)



「いじわるばあさん」
(昭和41年 7月31日・
サンデー毎日)

上記3点すべて©長谷川町子美術館

Q) 「いじわるばあさん」が町子先生の性格に一番似ているといわれており、いじわるばあさんだけが異質な漫画ではないかと思うのですが、いつ頃書かれたものでしょうか。

A) 橋本：サザエさんの次がエプロンおばさん、その次がいじわるばあさんで昭和30年代後半から昭和40年代にかけてです。いじわるばあさんの世界は本当にシュールであり、現実にはやったら隣近所の付き合いができなくなるようなこともどんどんやっていますが、それが決して嫌味ではなく必ず笑いに持っていけるところが町子先生の天才的なところなんです。

Q) いじわるばあさんの前後で作風が変わったということはあるですか。

A) 橋本：家族の形態の違いがあると思います。戦後のサザエさんは三世代同居して祖母も孫

もいるという当時の普通の家族の在り方、エプロンおばさんは下宿屋さんの話なので他人を含めたコミュニティの在り方、いじわるばあさんは四人も息子がいるのにたらい回しになっており、日本の経済復興とともに歩んできた家族像の道筋を町子先生なりに漫画に投影して、いじわるばあさんが生まれています。単にいじわるなだけではなく、悲哀が含まれていて、淋しかったり悲しかったり、そして動物をこよなく愛するということはどこ作品にも共通して描かれています。

A2) 館長川口淳二さん(以下「川口」): 町子先生はサザエさんであり、いじわるばあさんでもあったねといわれていますが、漫画に込めた想いがあったと思います。こうなって欲しいという願望もあり、お母さん、お姉さん、妹さん、姪子さん達という家族に囲まれていた町子先生が、幸せの中で何か別なものを持っていたという風に捉えています。

A3) 橋本: 新しい美術館の目的の一つはサザエさんを展示するということがありますが、もう一つには町子先生の多岐にわたる仕事をお見せするという事です。サザエさんだけにこだわるのではなく、町子先生の多彩な仕事をいろんな切り口でお見せできたらと思います。



館長の川口淳二さん



学芸員の橋本野乃子さん

Q) 町子先生は、サザエさんという家庭漫画を描いているため、結婚してお子さんもいたのだろうと想像していたのですが、生涯独身だったということは意外でした。女性だけの家族を一生懸命働いて支えた人だったのですね。お友達も少なかったということですが、漫画家という孤独な生活をされていたせいだったのでしょうか。

A) 川口: 自分の願いというか、こういう家族、家庭が欲しいという希望はあったと思います。ですがサザエさんの連載は毎日のことなので忙殺されていました。町子先生はあまり外に出ないにもかかわらず、世の中をよく描写しているなと思いました。家では週刊誌をしょっちゅう読むわけでもなく、新聞は朝日新聞一紙だけだったのに、世の中を見るのがすごく早かったのです。ビートたけしさんと話した時に、見たものをその場で描かないで帰ってから描くそうで、その点で町子先生と似ていると話していました。一言で表現してしまえば、天才だったのだと思います。

Q) 町子先生は旅行によく行かれていたそうですね。

A) 橋本: 昭和39年に海外旅行が解禁されて、その年から海外旅行に行き、その後は毎年のように行っていました。朝日新聞が取材旅行のような形で行かせてくれて、帰ったら必ずその旅行

のことを作品にしていました。一番長い新聞連載の休載は1年半でした。最初は体調不良でお休みに入って、少し良くなってきたら海外旅行に行行って戻ってくるという感じでした。

Q) そんなに休むと書きたくなくなってしまうのではないのでしょうか。毬子さん達家族は、町子さんの仕事が忙しいので心配して辞めさせたがっていたというエピソードもありますね。

A) 川口：それもあったと思います。朝日新聞の担当者と毬子さんの間で攻防があったようです(笑)。

Q) 川口館長さんが姉妹社に入社されたのはいつ頃ですか。

A) 川口：私が入社したのは昭和51年で、7人目の社員でした。全員社員というよりは奉公人という表現が合っていました。本を書いて印刷屋と交渉するのは町子先生、取次と話すのは毬子さん、伝票を書くのは洋子さんの役割でした。社員の仕事は、本の出庫と入庫、一番大事なのは返品を受け入れて、その他に町子先生のご家族の運転手をしていました。例えば、トラックで本を運んで帰ってきた後、夜は町子先生やご家族を車で送迎したりしました。

Q) かなり特殊な仕事だったのでしょうか。

A) 川口：私は大学卒業後、普通の会社に勤めていたので、最初は特殊だと思いました。でも、「よし、頑張ってみよう。」と決めました。妻と子供もいたので家族のためというのもありましたし、妻の母が毬子さんと同級生だったというつながりもありました。

Q) サザエさんは全68巻ですが、川口館長はどのタイミングで入社したのでしょうか。

A) 川口：67巻の時に入社しました。入社して3年後の昭和54年に朝の連続テレビ小説「マー姉ちゃん」がヒットしました。新聞連載も単行本の出版も終わっており、「マー姉ちゃん」の原作となった「サザエさんうちあけ話」の新聞日曜版での連載が終わって本になった後のことでした。ブームは10ヶ月くらい続いて漫画が飛ぶように売れ、倉庫にあった返品分も含めて在庫が全て掃けました。どんどん増刷をかけたところブームが終わってしまい、出版の宿命で返品品の山になり、倉庫の2階の床が抜けてしまいました(笑)。その後、絵本を出して、「サザエさん旅あるき」を出したのが最後でした。アニメは昭和44年10月5日に始まりました。サザエさん、エプロンおばさん、いじわるばあさんは、それぞれ実写ドラマ化されています。

Q) ドラマなどの脚本は、全てチェックされていたのでしょうか。

A) 川口：最初の頃は毬子さんも町子先生もチェックしていました。芸術新潮⁶に掲載されているドラマ「マー姉ちゃん」の脚本家である小山内美江子さんのインタビューの中に、食事のシーンのマナーについて毬子さんからクレームがあったという話が出てきますが、そのような細かいことは沢山ありました。毬子さんは行儀には厳しい人でした。貞子さんも厳しかったので娘達から恐れられていました。一方でサザエさんは足で襖を開けるようなお行儀の悪いところがあり(笑)、長谷川家にはあり得ない話ですので、町子先生が求めていた家庭像や生活を漫画に描いたのかもしれないですね。昭和60年に美術館を開館してしばらくしてから、毬子さんはいろいろなことを任せるようになっていきました。開館から2年後に商店街からサザエさん通りと名前を変えたいという話が来ましたが、私は毬子さんから、サザエさん(アニメ)はそん

6 芸術新潮2016年9月号(新潮社)特集「こんなに凄かった!長谷川町子と『サザエさん』」

なに長くは続かないということを商店街の方々に伝えるようにいわれました。一度商店街の名前を変えてしまうと使い続けなければならなくなるのに、アニメが終わってしまってもいいのかという意味でした。商店街の方々からはアニメが終わっても使い続けたいという回答があったので、それならばということで了承することになりました。

Q) 外部との交渉事については、全て毬子さんが前面に出ていたのでしょうか。

A) 川口：毬子さんは、町子先生を外に出さないように物凄く大事にされていて、テレビ局やスポンサーなどの外部関係者とのやり取りは全て毬子さんが対応していました。作品制作以外の嫌なことについては、全て毬子さんが引き受けていました。私も、町子先生と二人きりの場で、町子先生の考えを聞き出すというようなことはできない雰囲気でした。

Q) サザエさんについては著作権管理がしっかりしているという話を聞いたことがありますが、町子先生にとって余計なことは増やさないようにしようという毬子さんの姿勢の現れなのでしょうか。

A) 川口：その通りだと思います。有名なサザエさんバス事件⁷は良い例だと思います。

Q) 裁判をやるのは弁護士ですが、実際に決断するのは権利者ですから、著作権に関して実際に裁判をするのはハードルが高かったのではないのでしょうか。

A) 監事松井真一弁護士：毬子さんは著作権を勉強したと話していました。毬子さんは自分が理解していないようなことをやる方ではなかったと思います。

Q) サザエさんの2巻を縦型で出版して売れたけれども廉価な海賊版が出てしまったというエピソードがありますが、この出来事が権利を守っていくというきっかけになったということはありませんか。

A) 橋本：ニセ本が出たという話は、当時の新聞にかなり大きく掲載されました。バスの事件よりもずっと前のことですが、それだけサザエさんの人気が出てきたということの現れであるとともに、作家自身の権利をきちんと守りましょうという意識の現れでもあったと思います。

Q) サザエさんのお話は、昭和の高度成長期に入るかどうかという頃の話で、懐かしい感じがするのですが、今の時代にあったストーリーを創作されるというような試みはあるのでしょうか。

A1) 橋本：アニメについては、時代が変わっていく中で原作通りに作るとちぐはぐになってしまふところがあり、それをどのようにカバーしていけばいいのかという過渡期に入ってきています。新しい道具を取り入れるのか、それともストーリーを変化させていくのか、悩ましいところです。

A2) 川口：例えば黒電話がそうですし、カツオくんは今でも学生帽を被って学校に通っており、家族全員でちゃぶ台を囲んで、座る位置は決まっていた子供達は座布団を敷かず正座しています。

A3) 橋本：変わらないことが良いと思う人も違和感を持つ人もいます。一度携帯電話が登場したことがありますが、サザエさんの世界観にはこんなものはありませんというようなクレーム

7 東京地裁昭和51年5月26日判決（昭和46年（ワ）第151号著作物等使用差止、損害賠償請求事件）

が沢山きました（笑）。

Q) サザエさんが働いているところを見たいです。

A) 橋本：原作ではサザエさんはハロー社という出版社などで働いており、最先端の女性だったのです。原作に従いつつ変えられるところもあると思いますが、アニメ独自の世界観も出来上がっているようです。

Q) サザエさん募金をやられていますが、その他の社会貢献活動についてお聞かせください。

A) 川口：サザエさんの着ぐるみがありますので、今年は熊本地震の被災地を訪問しました。今後は仙台の復興関連のイベントに行く予定もあります。全国各地で乗馬に励んでいる子供達が参加する日本中央競馬会主催の「ジョッキーベビーズ」というイベントでは、サザエさんが馬に乗って先導役をします。サザエさんを知らない人はいませんので、サザエさんを見かけると沢山の方が寄ってきてくれます。

5 むすび

今回のインタビューを通して感じたのは、長谷川町子美術館の皆さんがサザエさんをはじめとする長谷川町子の創作物を後世に伝えていくという仕事に対して、強い使命感を持っておられるということでした。

天才漫画家が創作したサザエさんというコンテンツは、どこにでもいるような普通の家族のなにげない日常生活をテーマとしながらも、老若男女を問わず多くの人から愛される魅力を備えているということを、今回のインタビューで再確認しました。

なにげない日常生活にいろいろな幸せがあるのだということ、大きい意味でも身の回りでも平和というものが大切だという想いを感じました。

そして、時代が移り変わり、グローバル化している現代においては、作者が意図したかどうかは別として、日本人の戦後世代の庶民の生活文化を記録する文化遺産としても貴重なものであり、また日本人の生活の様子を海外に紹介するコンテンツともいえる点を再認識する必要があるかと思いました。

この多くの国民に支持されたコンテンツの展開は、非凡な作者個人の創作努力というだけでなく、長谷川町子の家族、姉妹社、長谷川町子美術館、新聞社、アニメ制作会社、テレビ局、スポンサーなどの多くの方々の支えがあったからこそ、70年という長い年月を経た今も現役として活躍し続けることができているのだということが分かりました。

幼少の頃からサザエさんのアニメと母が買った単行本に親しんで育った筆者としては、サザエさんが日本の家庭を映し出す鏡として、昭和と平成の時代を超えて、これからも愛され続けていくことを心から願いたいと思います。

以 上